

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 5 2 : 5 8 - 7 4
Issue date	1896-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4685
Right	

に草せしのみ妄評多罪。

終に臨んで今の所謂新体詩を作らんとする諸君に一言したき事あり。蓋し内容と云ひ形式と云ひ八益しき議論は大家株の事なり。初陣の士は擬古にまれ近調にまれ、五七にても七五にても、苟くも將來國文發達の素資となるものは、力を極めて之を研究せ、思想の自由を得んことを勉め、詩句の精鍊に心を用ゐ、雅言は勿論、俗語、漢語、及外國語に至る迄、國文國詩中に陶冶せらるゝ限は、大珠小珠、巨材細芥の別も無く、盡く收めて已が藥籠中の物となし、聲に應じ手に従ひ、之を運用するの手腕を養生するを要す。多く作るは善し、去れど輕々に着筆する勿れ、推敲無くして稿を起す勿れ。特に近時流行する擬古の朦朧体に指を染むるの士は、須らく此体に免れ難き晦冥、夢幻等の如き弊を避けんとを望む、文義の晦冥は多く思想の晦冥を表するものなり、謹まざる可けんや。一片の老婆心禁ずる能はず、聊か鄙見を陳露して君子の教を俟つ、頓首再拜。

雜 報

○紅葉山の宴

所はこれ風流文雅の紅葉山、人はこれ阪山涉野の快男子、しかも一行を與にせる中川校長と、菅舎監と、淺井學寮との寄贈に係る猪肉を以てす。嗚呼斯宴裡焉んど無限の歡樂なからんやは。太白頻りに飛んで意氣軒昂、肝膽互に照して高話

快談、臂自ら交はり、膝自ら進む邊、一種不可言の情緒は津々として襲ひ來る。嗚呼此情緒は遂に不行者の想像する能はざる所なり。さらぬだに飽くを知らざる好酒家は、衆漸く散するも依然として團囀し、陶然として微醉え、嬉然として吟誦す。既にえて黃暉西轡に沈み、淡烟竹林に收まり、澄空水の如く、十一月廿五日の瀟爽は白三條帽の壯士を送りて已れも消えぬ。

○年末演說會

鳥兔苒々げに流水に異ならず。秋去り冬來り、茲に今歲も第一學期と共に、將に終りを告げんとす。即我演說部は去る十一月廿七日を以て、本年

最終の演說會を開けり。蓋遠來の珍客、米國哲學士シヨンモット氏を、木下總務が紹介せるを機とし、兼て佐久間部長の依頼によれる當地濟々翼教諭今川覺郎氏の演說をも請へるなり。事急卒に出でたるにも係はらず、部長の幹旋宜しきを得、異議なく今川氏の承諾を得たるは吾儕の痛く喜ぶ所なり。舊頃來外國語の氣運盛なる際なれば、午後三時の定刻には、瑞邦館裡既に立錐の地なきまでに人々集ひぬ。聽て軀幹長大、碧眼爛々、威ありてしかも猛からざるモット氏は一人の日本人を伴ひ悠々として入來り、直ちに演壇に就き、Several Characteristics of the Students of different Countries. なる演題の下に滔々として辯じ始めぬ。衆皆耳を傾け息を凝して聞く。其語調態度容易に品隲し得る所に非ずと雖も、要するに忠直精到明暢暢達、句句詳に耳朶に徹し、論旨自ら衷心を動かせり。此日委員等、氏の演說筆記を三部二年生石田昇君に托

す。石田君快く首肯せられ、左の澤文を寄せられれば、則ち掲げて君の勞を謝す。

シヨン モット氏の演說の要旨

余はこの壯麗なる學校に於て、教師、生徒諸子の前に立つて愚見を吐露するを得るを甚だ嬉しくれもふなり。今日まで遊歴したる國々は十五六、見舞ひしコレージュの數は六百を超え、路のほと、五萬哩にも及びぬ。旅の間に親しく觀察し來つるに、人種異なり、邦同じからずとも學生の特質は世界至る所に、いたく相似たるを知りぬ。亞米利加、英吉利、獨乙、印度、壞太利など盡く然らざるはなし。今その特質の二三を學びむ。

第一、諸國の學生は社會のいづれの他の階級よりも非常によく相似たること。校舎、書籍、學術衣服なども似たり、論する所、話す所も似たり、かしこの學生の考ふことは、この學生も考ふるなり。

第二、學生は同じ誘惑物を有す。而して種々なる社會の階級の中、最も迷はされやすきは學生なり。

第三、學生は共に力を協せ、一致して事を謀る傾

きあること。こは多くの事實によりて証せらる。米國にて青年の大學に入るもの、百人につき一人の割合なり。現時政治社會の腕利と稱せらるる人々の中、五十八パーセントは學生の生活を經、殘る四十二パーセントはさらぬ人々なり。アツプレトンの名士字典に見えたる一萬五千の最もすぐれたる米國人中、その三分の一餘は大學出身の人々なり。ハーバード大學創立せられてより他の大學續いて起り、それ等の大學を卒へたるものゝ總數今日まで二萬にのぼれるが、之を人口に比すれば一萬人につき四十人の卒業生を出す割合なり。

英國にてはかの有名なるオックスフォード、ケムブリッヂ兩大學に現今の〳〵三千の學生を有するほどにて、過去二百年間に多くの英才を出し、現に國會議場に牛耳を執るものもその間より起れり。ビクトリヤ女王即位以來、大學卒業生の法律家、教育家、紳商、著者、記者などになれるもの凡そ七千人あり。

獨乙の大學は最も盛大なり。ビスマークの誕生日を祝せむとて政事家、宗教家、文人、武人おほ

く集まり、學生も四五百人の代表者を撰びて行かゝめたりき。これ等はいづれも有名なる人々なり。

以上陳述したる如く、數に比して人物は多く、社會の上流に立つべきは學生なれば、若し學生の意見正しからば政略もまた正しかるべく、從つて各國民を結合し、各人種を一致せしめて世界の果より果まで、殘るくまなく文明開化の行き渡るやうにならむ。大學生は世界的思想を抱持するものなれば、いはゞ高き望樓にのぼれるが如く下なる眞理の光の進歩は盡く眼にうつり來るなり。今一つ、特質に數へつべきは愛國心なり。學生は如何せば已が國を世界に於ける強大なる國民たらしむるを得むかと日夜心にかけ、汲々としてその用意をなすに怠りなきものなり。余の周遊中、こなた、かなたにて日本の學生三四十人に遇ひしが、誰一人、國をおもふ心のふらふらぬはなし。こは貴國の爲に祝すべき吉兆なり。貴國は十分此ことに於て世界に誇るに足る。印度に於ては三千の國會議員、著者、記者の中に於て錚々たるもの多く學生より出でたり。獨

乙の大學生に至りては國を愛する念實に驚くべく、その語る所は國家にかゝはることとなり、祝杯を擧ぐるもまた彼等の國の爲にす。合衆國の學生は卒先して社會の進歩を計り、國民の幸福をすゝむるに熱心なり。今を距る三十年前、南北戰爭の際學生は義勇兵となりて戦ひ、身命を惜まず敵に當りたる結果、死傷ねびたゞしく閑校するの已を得ざるに至れるは人のよく知る所也。」愛國心にも blind なるや intelligible なることあり。いつれの國か他に勝れることのみありて劣れることなからざらむ。されば彼の長を取りて我短を補ひ、我優れる所をばいよ／＼卓越せしむるをこそ intelligible なる愛國心とはいふなれ。これ、國民を大ならしむる奥の手なり。

亞米利加、英吉利、亞細亞及びその他の諸國は軍艦、軍隊、彈藥のねはさが故に強さにあらず、國民を大ならしめむと身をも財をも捧げつくす確乎たる人々あるが故に強きなり。諸君の心を留めて聽かれたる親切を謝す。』

モット氏壇を辞して歸るや、今川氏代り登らる、先づ低聲もて西洋料理の後に日本食は如何

あらんと誤魔訛し、續て佐久間君の余を濟々蟹に訪はれしは午後一時五分にして、それより試験監督を終へ、急ぎ來場したれば、胸中殆んど考案なし。然れ共幸ひ茲に原稿を手にする。此原稿一行廿三字詰十三行の十二枚即ち六千九百字許、其間大小巨細交々説かれ、恰も波浪の起伏するが如し。波浪は終に岸に當つて止まる。余の説亦何等の岸に止まるや豫め期すべからず。兎角言文一致の体に、或時は素讀之、或時は談話し、或時は創り、或時は加へて以つて一場の法螺を吹かんと、蛆虫が繭を脱して飛蛾となる底の言句を駢べ、愈本題に入りて大飛揚、大直下、大曲折、大廻轉、灑蕩洒落、佻巧新奇の語辭を弄し、徹頭徹尾聽者の臍をよらしめたり。或は小豆と奈良の大佛との比較中、大佛の鼻中には人傘を開きて出入し得るを聞く、若し此大佛にして西洋人なりせば尚ほ其鼻は太からんと戯れ、或は禿頭の例を取て、幾何の毛髪を抜けば果して禿頭と稱すべきや、一本か百本か千本か其際限は如何とぞぞけ、或は都の一里と田舎の一里、朝の一里と夕の一里に長短不同あるかを疑ひ、或は世人

の長芋の成長速かなるをば賞せずして、却て成長より遅き筈を譽むる所以を怪しみ、或は蒼空三千の星を指して無數といふ、然らば三千〓無數なるかと博之、或は百萬の軍萬丈の氣焰を里數に算出して其の啞呆らしきを難じ、其他日月音光流車砲彈分子微虫、一々指摘比較して、大は小、小は小、大小殆んど差別なきを論じ、終りに吾人が大小遠近と稱するは、決して絶對の大小遠近に非ずして、只比較上又は便宜上之を名くるのみ、眞の大小遠近に至ては凡知の考及し能はざるものなり云々と局を結んで、大拍手の裡に降壇せらる。嗚呼一撮の土積んで大山を爲し、涓滴の水集つて深海を形作る。高きに登りて招けば臂恰も長きを加え、風に順ふて呼べば聲恰も疾きを増す。斯の今川氏の所論諧謔の間吾儕大に服する處なくんばあらず。因云氏の原稿は、請ふて本誌の本號及次號に掲ぐるの榮を得たれば、論説欄に就て見るべし。

○兎 狩

霜露既に降りて、龍南健兒の元氣勃焉とて抑

ゆべからず。即ち同志相糾合して、大に長耳郎を錦野及堂明の二地方に狩る。錦野組は四日午後一時を以て校を發し、一夜を阿蘇の民家に明かし。拂曉魚貫して蜿蜒たる山路に登り、活潑々地、葛蘿を攀ぢ、荆棘を闢き、綱を張り綱を揚げ、轉騰すること前後十餘回にして獲る所兎七頭。日暮れて後着校す。同窓歡んで之を迎ふれば聲音涸れて殆ど答をなす能はざる者あり。以て如何に諸氏の盡碎せるかを知るに足る。堂明組は夜來の雲雨に妨げられ。行く者頗に減せり。然れども錦山組既に獲せり。豪宕耻を知るの士寧んぞ二の足を踏まんや。半夜衾を蹴て片窓を推せば、宿雨新たに晴れて寒月素光を放つ處、刀利の朔風颯として樹梢に聲あり。急に結束途に上れば、四十の壯士影黒く、行くこと矢の如く、朝暾未だ東に昇らざるに既に目的地に達せり。即ち袂を連ねて山に入り、ホイ／＼ワイ／＼木魂に響かし、已れ狡兎、一匹も遁すものかはと攻め寄せたり。果せる哉午下三點に及總て六匹の大兎を生擒し、踴躍一番三里半程を二時間可りに走せ歸れば、あな不思議、あな遺憾、嚮きの兎は皆

道に逸して影だにもなし。翌六日獲物開を雨天
体操場に催ふす。會するもの、百未滿。嗚呼、百未
滿。六百青衫子中行さし者只だ一百餘人なりし
か。於是乎竊かに嘆ず、當年の意氣今將に銷しつ
ゝあることなきやを。學窓の下縦横の字にのみ
拮々たるは、識者の取らざる所なり。あらず、拮
々たらば何ぞ金枝玉條を本誌上に活躍せしめざ
る。時に臨んでは個々閉蹙せんより、學校協同、
氣を山野の間に養はんこと亦可ならずや。

○弓術部射納式

(澄川千投)

我弓術部は、十二月十一日を以て、本年の射納式
を舉行せり。當日は、夜來の雨未だ全く晴れず、
天氣如何と懸念せしも、幸にして四塞せる雲霧
次第に收まり、正午頃よりは、近來稀、温暖小春
の如く、弓を引くに、眞に適當の好日和となりた
り。出席者は、生駒師範、中川校長、杉山部長、大
浦、園、山崎、余田、東、黒木の諸先生を始めとて、
凡そ二十余名なりき。今其の概況を記すれば、正
二時半の號鐘と共に式を始め、寸八の金的はか
げられたり。あはれ、天上の一孤星、果して誰が

手中にか歸するぞ、人々皆、已高名せんと、手ぐ
すね引きて、待ちかまへたり。已にして、台矢は
ふられたり。射手は立てり。弦聲一發、見事に的
中す。誰ぞ射手は、曰く杉山先生、我が弓術部長
萬歳!! 其的中余りに速なりしを以て、的は振が
れ、再び新に代へられたり、園先生次で射り、
的の「コッ」と音して外れたる、山崎先生の箭に、
的の動きたるなど、間一髪可惜哉。遂に第二の星
は、二立目にて、東先生の掌中に落ちたり。拍手
喝采。論功行賞、例によりて、例の如し。次に、五
寸的台射競争を行ひしに、杉山部長、余田先生の
四つ矢にて、山崎先生の「チムリ」東にて、勝利を
得られたる、など最見事なりき。次に源平競射を
行ひ、互に輸贏あり、和氣霽然、其の式を了へ、弦
を收むるとき、晚鴉三四點、西山に向ふて飛ぶ。
猶遺憾なりしことには、新舊部員、就中新部員出
席者の、甚だ勘かりしことなりとす。諸君、通常
例會には、大に手腕を振ひながら、兎角儀式立ち
たる時に、尻込せらるゝは何事ぞや、謙遜も時に
こそよれ。未熟なれば忤云ふは、無用の遠慮と云
ふべし。場數を経ざれば、修業は積み難し、やる

可し、やる可し、婦女子の如き斟酌は、大に排斥すべし。又佐久間、中沼先生始め、參觀人諸君に多謝す。諸君試みに、此積翠の間に弓矢を執らんとするの勇氣はなきや如何。掇てこれより例の酷評を試みんに、杉山部長の大々的氣概は更にも云はず、諸先生方の御手際いつもながら感服々々。次に吉田委員は益々熟達、請ふ大成を期せよ。檜林委員は双肩の工合大に宜しくなれり、今

少しく注意せられなば、尙一層の射前となるべし。寺井君當日何故か先日 of 勢に反して不手際なりき。三原君馬手の送り、君の苦心察すべし。

こゝ一層の研究を要す。蒲池君今少し頭を的に向けられたし、ふるひは殆止めるが如し。宇野君近頃少し收まり兼ねるは、是も亦邪氣の故か。田川君は一層奮發せられよ。君の技前途頗る有望なり。推手に心すべし。山崎君の中り恐る可し、然し「ツマガケ」は見苦し、又弓手の崩然前に出づるは、心すべからずや。望月君は近頃久しく御見受申さず、夫故か當日例の氣概なかりき。ちと勉強せられずや。望永君体の伏え過ぎ、推手の力足らず。全体より云へば、諸君の御手並益々上達

するは、眞に喜ぶべし。猶能々卷簾にて射玉へ、足踏み、胴づくり、引き取、放れ、杯能々卷簾にて熟練するの後、試みに的に對せば、或は神ありて來り助くるが如く、心手一致、識者も亦將さに目を刮すべし。諸君勉旃、妄評多罪。

○擊劍紅白勝負盲評(のけてふ、合評)

妖雲天を掩ひ、怪風地を捲き、鼙鼓撃々として空に轟き、硝煙濛々として谿谷に迸り、幾千の鯨鱗海を蔽ふて來り、幾萬の猊獅山を埋めて至るの時に際せば、夫れ何を以て之に應せんとするか。大艦巨砲以て之に應すべきか。否、崇壘深濠以て之に應すべきか。否、帶甲十萬の猛卒か。否、三寸の舌か六寸の筆か。否々、發しては萬朵の櫻となり、凝つては百練の鐵となる。神州獨特、敵愾の氣象、護國の赤心、即ち此大和器あるのみ。君見ずや、芙蓉峯頭萬古の雪、玲瓏として仁義の高潔を表す。又た見ずや、琵琶湖底千秋の水、淨淙として忠孝の懿靈を存す。皇統連綿、萬世一系、旭旗の翻る處櫻花隨つて馨り、未だ嘗て寸土も外敵の馬蹄に汚されたることなく、儼然として萬

邦の間に卓立し、夙に威を八紘に輝かす、嗚呼大和魂なるかな。大和魂なる哉。若し此氣象にして消耗せんか、我神州の將來また知るべきのみ。然り而して能く此の氣象を養成するもの、實に文武の二道にあり。我六百の同窓が、朝に文を講堂に修め、夕に武を道場に練るもの、豈偶然ならんや。

紅

白

斯に十二月十

小手 東	戸策	澤田 一龜	一日、龍田の
小手 東	戸策	澤田 一龜	山は唐紅の錦
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	を飾りて、白
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	河の水清漣を
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	織るの時、擊
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	劔紅白勝負は
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	雨天体操場に
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	開かれぬ。午
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	下三點鐘、開
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	會の擊拆鏢爾
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	として響くや
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	觀者蟻集已に
面 岡本	幸實	根岸橋三郎	場を圍めり。

面 戸次	正	上原 義雄	中沼部長、佐
面 戸次	正	上原 義雄	久間教授を初
面 戸次	正	上原 義雄	めとして、職
面 戸次	正	上原 義雄	員部員肅々と
面 戸次	正	上原 義雄	して場に入り
面 戸次	正	上原 義雄	各席定まる。
面 戸次	正	上原 義雄	やがて委員上
面 戸次	正	上原 義雄	田君開會を報
面 戸次	正	上原 義雄	じ、紅白兩組
面 戸次	正	上原 義雄	は分たれぬ。
面 戸次	正	上原 義雄	數十の健兒短
面 戸次	正	上原 義雄	襦袢袴、物の
面 戸次	正	上原 義雄	具に身を固め
面 戸次	正	上原 義雄	各竹刀面小手

を携へて、紅は東に白は西に分る。あはれ弓矢八幡大菩薩、武運の程を守らせ玉へ、と敗るを耻る丈夫兒が、各自に己が勝利を祈る、心の裡こそ勇ましけれ。まづけふの戦の手はじめに、白軍の陣中より、靜々と立ち出づるつは者は、澤田彌五郎一龜殿、今日初陣の出途に、天晴功名顯はさんと、足場をはかりて待ちかけたり。

此時紅軍の陣中より、現はれ出でたる大の男は、これぞ東作兵衛殿にてはしける。互に式の目禮終りて、ヤツと掛たる聲もろ共、又を取つて立ち上り、一撃三撃戦ひしが、軍に馴れぬ彌五郎殿、心ばかりははやれども、胴と小手とに深傷を負ひ、陣所をさしてぞ引き退く。代つて根岸隼人橋三殿、敵に勝りし大兵なれども、刃を取つて立ち向へば、其の捷きことましろの如く、打ちこむ刀尖誤らず、敵の眉間を撃ち破り、腕に手傷は負ひたれども、霰と下す太刀尖鋭く、再び敵の眉間を割りて、難なく勝をぞ得たりける。つひて出来る兵者は、紅軍中の快男子、岡本無三四幸實殿なり。軍はけふが初めてなれども、敵に向つて些ども臆せず、眞額上段に振りかざし、滅多無性に打ち下ろす、太刀尖中く、侮りがたく。二度まで敵の面を撃ちて、悠々然たる手なみの程に、觀る者一齊に手を拍ちて、ゑたりくど賞めたりけり。次で白軍より出で玉ふは、襲原源太三雄殿、さしも鍛ひし手のうちも、敵の氣勢に吞まれてや、同じく眞額切り下げられぬ。次には石井兵介殿、侮りがたき敵と見て、急がず騒がず体をかまへて、

敵の亂撃こともせず、隙を狙つてエイヤツと、面をえたくか切りつけたり。無三四いらつて打ち下ろす、太刀先横にうち拂ひ、これびは小手に切りつけたり。立ち代つて紅軍より、静々出来る若武者は、山崎三郎仲次殿、けふの初陣よき敵の、首を提げ將軍の、厚き御威に預らばやど、太刀取り構へし身づくろひ、頼母しくこそ見えにけれ。互ひにヤツと聲かけて、一合二合撃太刀の、切さき交るよと見るまもなく、二度まで敵の眞額割りて、疾くも勝を得たりけり。續ひて笠大内記殿、味方の仇敵思ひ知れよと、勢猛けく斬りかゝる、最初の一太刀受損じ、胴を研られて三郎殿、忿怒の面色朱を注ぎ、傷手に屈せず撓まず去らず、踏込みく、衝をつくす。さしも修練の太刀風に、當りかねたる大内記殿、面と胴とに切りつけられ、無念ながらに引退く。代つて内藤主税殿、敵は最早疲れたりと見えけるに、何程のことやあらん。と抜合したる刃の稻妻、兩三合撃よと見えしが、敵の虚をや見出しけん。胴をめかけて了と研る、三郎之に少しも屈せず。勇氣以前に百倍し、益々はげしくわたり合ふ。一上一下虚々實

々、只陽炎の閃く如く、透間もなく撃太刀を、主税殿も暫しが間は、あなた此方にあしらひしが、遂に敢なく撃たれてけり。かくと見るより白軍より、飛び出でたる五藤小冠者殿、テモ憎き敵の振舞哉、味方の仇怨思ひ知れやと、云ひも終らず修練の勦撓、飛鳥の如く駆けめぐり、前に顯はれ後にかくれて、秘術をつくす働きに、三郎殿は已にはや、前數回の戦に、身神共に疲れたれば、眞額目かけて研りつけられ、一度は面に報ひたれど、再び眉間に斬りつけられ、味方の陣所に引き退く。されども君が初陣に、けふのはたつき天晴と、感せぬものこそなかりけれ。益勤めはげみ主へや。次に紅軍の森永相模殿、をのれ小冠者一撃と、切りこむ太刀尖過たず、敵の小手をば傷けた。こはまぐとつたり小冠者殿は、敵の手元へつけ入つて、峰に木傳ふ猿獺の如く、千變萬化の秘術を盡して漸く勝を得たりける。續ひて出で来る御方は、此前數度の戦ひに勇名を顯はし玉ひたる、小林内藏頭殿、さしも手だれの刃尖に、敵の眉間を割り玉ひしも、小冠者殿が武運や強かりけん。小手と面とに報はれて、遂に敗れて引

退く。代つて紅軍の陣中より、する／＼と立出で玉ふ、此御方を誰とかなす。われ此度の戦ひに、天晴功名あらはして、あはよくば、一方の旗頭となりなんものと、眞先駆に紅軍に、御味方致せし愛嬌武者、岐部大膳大夫富雄殿なり。流石の五藤小冠者殿も、二度まで眞額打ちわられぬ。代つて現れ出玉ふは、白軍中に名も高き、花の若武者、上原小次郎義雄殿なり。太刀合はすよと見るまもなく、小手と面とをまたくか打たれて、岐部殿もろくも引退く。次には厨川左京進殿、まさり劣らぬ互の太刀音、冬の深山に杣木樵る、斧鉞の響に異ならず。勝負もはてしと見る程に、左京進殿の太刀筋次第に亂れ、小次郎殿の勝となりぬ。次に宮國右京進殿、小次郎殿が破竹の勢に敵し兼ね、面一つは參らせたれども、遂に敗軍となりにけり。次に紅軍の陣中より、天晴健氣の若武者や、戸次小五郎是にあり。日頃きたひし劔の切実、受けも見よやとひらめかす、するどき太刀風ものともせず。一上一下と術を竭す、雌雄は未だ判かざりしが、數度の試合に小次郎殿、たゞむき次第につかれ來て、面と胴とを撃たれけり。是を

見るより白軍より、飛で出でたる田岡猪之介殿、
 味方のかたきと打ちかゝる、此方もさるもの受
 け流し、電光石火の眼に晃き、又た、陽燄飛ぶ鳥
 の、形を影に見る如く、寄せては返す太刀音被
 聲、囁々エイ、ヤア、と、勝負はてし
 もなかりしかば、一本勝負と聲かゝり、胴一本を
 參らせて、小五郎殿の勝となりけり。次には杉町
 兵庫殿、敵の疲れに付け入つて、苦もなく面と胴
 とを取りしが、次で出来る紅軍の、勝木四郎殿に
 討たれてけり。次に白軍の淺見右近殿、彼何はど
 の事やあらんと、激しく切りこむ太刀尖を、四郎
 殿しばしあしらひしも、二度まで胴を切られ
 てけり。次に川原田内記殿、右近殿に切つてかゝ
 り、入りつ亂れつ切り結び、暫時鎧を削りしが、
 小手の深傷に引き退く。代つて吉丸溪齊殿、兩段
 になれど丁と撃つ、大刀の切尖受け損じ、身体つ
 かれて右近殿、眞額微塵と碎かれたり。されど敵
 三人まで、手傷一つ負はずして斃されしは敬服
 々々。また溪齊殿の大刀尖、常に敵の腹に向ふは
 見苦し、心して改められよ。次に財部内膳殿、
 面に手傷は負ひたれども、難なく溪齊殿を討取

つて、池田勝入齊殿に向はれしが、立ち合ふと聞
 もなく、敵より小手二つ參らされたり。勝入齊殿
 勝に乗じて、野口掃部頭殿に向ふ。掃部頭殿は名
 に負ふ五人切の勇士なれど、老練敏捷の勝入齊
 殿が、得意の小手には敵し兼ね、胴一つ參らせし
 のみ。かねての修練あらはすによしなく、はかな
 く仆れ玉ひしは、余りにあつけなかりし。次ぎに
 は白軍の勇士岩佐判官殿少しも臆せず驕がずし
 て、悠々として出で玉ふ。双方一齊に立上り、ひ
 るます屈せず切り結ぶ。何れ劣らぬ互角の勢、精
 神切りに加はりて、月落るとき星流れ、雨霽るゝ
 とき虹横はり、朔風雪を散らすが如く、沙水に布
 を曝らすに似て、閃々晃々、微妙の手練、又た云
 ふべふもあらざれば、看る者一齊喝采る聲、雲時
 は鳴りも止まざりしが、月桂冠は判官殿の頭上
 に下りぬ。次で出で来る其人は、紅軍の御大將、
 川崎左衛門佐殿。まさり劣らぬ勇士と勇士、上
 一下修練の突戦、胸さきつかんと晃めかす、判官
 殿が刃の切さき、是さながらに雲峰の、腰より出
 づる電光の、地上を走るに異ならず。さるを此方
 はことゝもせず、受流しまたうち拂ひて、連りに

進む刀光は、潮水を流るゝ月影の、波の漣々狂ふに似たり。正に是れ、二龍九霄に戦ふ時、霏々として金鱗降り。兩虎幽谷に挑む時、颯々として勁風起る。孰れに疎鹵はなかりしが、左衛門佐殿の力やまさりけん。一太刀面に手傷を負ひしも、面と胴とに勝を得たり。次に松原左近殿、是また白軍中の剛の者、耶と鋭き太刀風に、撃を發石と受留めて、拂へば透さずこむ刀尖を、支えて流かず一上一下、互ひに劣らぬ手練のはたらき、爰よりれどす太刀筋を、あちこちはづす虚々實々、火花を散らして争ひしが、また左衛門佐殿の勝となりぬ。次に出でくる御方は、力量といひ武藝と言ひ、白軍中に並ぶものなき、吉田源左衛門高光殿。怒の面色凄まじく、言ひ甲斐なき味方の奴輩、敵は大將のみなるに、只だ一人にかりたてられ、此の有様は何事ぞ。我打ち取つて手柄にせんと、秘術を盡す奮撃突戦、正に是老龍虎魁雌雄を争ふ。豈凡庸の闘戦ならんや。修練精妙、神出鬼没、足曳の山も之が爲めに鳴動して群獸走り、いさなとる海も之が爲めに風燥きて鱗介も沈みやせん。と思はれしが、源左衛門殿は小手一つ參ら

せしのみにて、面と胴とに切りこまれ、是また左衛門佐殿の勝利となりぬ。次には白軍の御大將、植田右兵衛佐殿、あはれ斯道には、わけて熱精なる殿におはせども、天性の遜讓恭謙は是非もなく、常に敵に先を制せられ玉ひて、また敗軍となり玉ひしぞいと惜しき。かくて遂に紅軍の大勝利となる。川崎將軍の得意思ふべし。願はくば愈よはげみ益つとめて怠り玉ふな。われ戦勝の祝賀として、左の金言を參らせん。『克つて盔の緒を締めよ』(盲評多罪)、

右勝負終りて、委員家入君は昇級者并に編入者の姓名を報告し、一同に茶菓を饗せらる。今迄の敵も味方も、一つ所に團變談笑、和氣藹々の内に歡をつくして散會せしは、午後四時を過ぐることに正に三十分、龍山の松嶺颯々として、白河の水聲瀟々たり。

昇級者及び編入者の姓名は左の如し

池田麗太郎 吉田 高光 吉丸 一昌 野口 常治

右第二級へ昇級

佐伯 米松 大久保有明 淺見 一 荒木勝三郎

右第三級へ昇級

財部 仲二

右三級へ編入

上原 義雄 厨川 肇

右四級へ編入

藤原 三雄 山崎 仲次 小笠原長太郎 野老山長角

内藤 本義 岐部 富雄 伊東 久吉 石井敬太郎

右五級へ編入

○柔道紅白勝負

(熊豐生授)

十二月四日、我柔道部紅白勝負を行ふ。來り會する者賀來部長を始めとして其數殆んど二百に滿つ、午後三時開會す、委員友枝君先づ起ちて開會の辞を述べ、其要に曰く『顧みれば明治廿四年の事なりき、嘉納先生の我校に長たるや斯に始めて柔道部を起せり、其當時諸事未だ整頓せず、道場も今の擊劍道具室に疊を敷きてありしなり、それより今の此の道場に移せり、此の道場初めは二三十疊なりしも部員の増加は遂に道場の狹溢を告げしめ、斯に百疊の大道場となれり、百疊の道場に至りては殆んど日本一なるべし否恐くば東京講道館に次ぎては世界一なるべし、此の世界一の大道場に出入する諸君、其の道場に對

しても勉めずして可ならんや、又此道場を瑞邦館と名けたるは更に故有栖川宮殿下の御染筆に因れる者にして其の名の佳なると殊に殿下の御功德に仰ぎ鑑み勉勵せざるを得んや、今此の瑞邦館に來り學ぶ者他日大なる瑞邦に於て驚天動地の大活動を成す事を期せずして可ならんや、夫れ武道の玄妙なる能く天地の神秘に入り又其理の應用に至りて萬事萬物に至盡せざるなし、然れども吾人の愚なる往々私慾の雲に蔽はれ未だ真如の大月を見るを得ざれども、雲宵の間其の微光を認め得ずとせんや諸君乞ふ之れを勉めよ、次に我柔道や又は彼の擊劍に於て殊に寒稽古なるあり、彼の曉星天に在り寒影地に映する時に當り朔風怒號寒威膚を裂くあるも決然衾を蹴て起き霜を踏み氷を破りて道場に入り武を演ず其の困苦到底薄志弱行の徒の能くすべき所にあらず、然れども其稽古終りに漱き顔洗ふ時に當り温氣内より湧き腦裏洒然、頓に仙郷に遊ぶの感ある趣味に至りては亦到底門外漢の知る所にあらざるなり、其期正に近きにあり、諸君幸に勉めよ、又殊に注意すべきは禮儀のことなり、武

道は尤も重きを禮儀に置く、然るに往々道場に於て先生又は上級生と稽古するに當り上座より禮する者あり、此れ元より其人の故意にあらずして不注意の致す所なれど以後かゝる過なからん事を望む、又此道場に入出するときは必ず道場に向ふて敬禮を爲す事に定りあり、諸君之を注意せられよ、云々

既にして數十の健兒分れて二となり、紅は北面し白は南面して座す、皆是れ勇氣勃々たる好丈夫、實に我校六百の中堅たらん者なり、今や文弱の濁流滔々とて青年純潔の血を浸染せんとするときに當り毅然俗流の外に立ちてよく三冬九夏の困難辛苦に堪え以て『鼓舞天地之正氣』せんとす、諸君の望や大に諸君の任や重し、諸君たる者豈勉めずして可ならんや

紅白互の禮了れば二健兒の既に場に上るあり、是れ坂卷阿部の二健兒なり、夫れより勝負數十番皆よく其の力を盡し甲攀乙駁互に勝敗ありて吉田富田兩君に終る、先づ初めにては堀見君の態度富米野君の業一は宜しきを得一は巧を極はむ、中嶋琢磨君の業に堪能なる其の素養の至れ

る思ふべし、君の前途多望乞ふ勉めよ其他鍋嶋福地諸君は新來生中の鏘々たる者なり、久保君は前委員久保惟脩君の令弟にゑて其手並感服の外なし又其の殊に來會せられたるを謝す、又中嶋章君の中嶋廉夫君に『失敬』云々たると松原君の三人投は頗る目覺まゑかりき、敬服々々、次に富田君の沈靜なると吉田君の敏捷なるとは流石は大將軍丈ありて懸待の法、進退の度備さに其妙を極め或は楊柳の春風に戯るゝが如く或は猛虎の嶋角に吼ゆるが如く其の端倪すべからざるや吾人をして感嘆措く能はざらしむる者あり

勝負終れば茶菓を供し委員は新昇級者の姓名を報じ和氣霽々の中全く散會せしは既に晚餐の喇叭聲音嚶曉として響ける時なりき、此の日只其遺憾とせし所は黒帶者の出席少かりしにあり、先輩諸氏希くば稽古に勝負に益後進の士を教導して其後を承けしめ此道の振作を計れ、又後進有爲の士幸に部名の爲め校風の爲め能く教を先輩の士に承け愈勉勵し玉は、『我武維揚』此の道の振興期して俟つべきなり、乞ふ兩々相俟て以て其美を就せ至囑至囑、

3m	3m	3m25	2m	7m20	1m15	.30	3m10	1m	1m	.30	7m	.36	2m15	4m	時間				
足掃	抑込	喉絞	抑込	引分	喉絞	体落	体落	膝車	大外刈	足業	引分	横捨身	大外刈	抑込	業名				
福地周二郎	小川瑛五郎	蓼原三雄	大野三雄	池田麗太郎	富米野之助	徳關豐之助	荒川常吉	鍋島資高	間崎道知	鍋嶋資高	米原資高	堀見末子	納富陳平	堀見末子	人名 左右 紅白				
1m	3m10	.30	3m	.30	3m30	2m30	1m40	3m15	6m	.30	.30	1m	1m35	.20	時間				
背負投	腰投	体落	大外刈	体落	抑込	大外刈	大外刈	足掃	引分	足掃	体落	抑込	体落	眞向瀧	業名				
富田直	吉田久太郎	中村厚二郎	富田直	松原常興	國廣剛毅	友枝高彦	松原常興	中嶋康夫	鈴木四郎	岸川太郎	鈴木四郎	瀧谷鉄郎	久保弘吉	北島弘吉	中嶋琢磨	住田正雄	小川瑛五郎	中嶋琢磨	人名 左右 紅白

尙平素の勉強と當日勝負の結果に由り昇級されたる諸君左の如し(新)は新來生

五級甲より四級乙へ

中島 康夫 國廣 剛毅 松原 常與

五級乙より五級甲へ

相川林三郎

六級甲より五級乙へ

中島 章 鈴木 四郎 池田麗太郎

小川瑛五郎 南里 猷一 石橋愛太郎

六級乙より六級甲へ

於保 庫一 宇野 榮 石川 清人

三原新太郎 宮國千代吉 櫻井浪之助

日下部瀧二郎 米原 弘 荒川 常吉

七級より六級甲へ

(新)中島 琢磨 (新)深川 靜 (新)福地周二郎

(新)鍋島 資高 (新)富米野 蕭

七級より六級乙へ

志波 鷹治 古川 高治 平田 全祐

關 嘉八郎 (新)堀見 末子 (新)内野淺二郎

(新)坂卷 登助 (新)山崎 暢 (新)納富 陳平

(新)阿部 龜彦

○寫眞の寄贈

去る十月來校の鹿兒嶋尋常中學修學旅行隊より贈り來れる撮影總て十二葉、曰く薩摩西方、全阿久根龍口、肥後人吉町大橋、全青井神社、球摩川出船、八代上陸、水前寺、出水神社、松橋停車場、大隅加治木、全栗野村砲場及び我校運動會當日の景これなり。由來同校の諸氏頗る武骨の稱あり。圖らざりき、此美的の贈物あらんとは。多謝々々。將に之を巨額に納め、本會委員事務室に掲げて、永く其芳志を記せんとす。聞くならく、諸氏は又當地尋中濟々巒にも此種の寫幀を贈れりと。迅雷一掃光風霽月の友情愛すべき哉、掬すべきかな、昨の兩駿馬蹄嚙の夢は、今日の愛すべき掬すべき友情を結んで餘りあるかな。

○歳暮の辭

昨日といひ今日とくらしつ飛鳥川

流れてはやき月日なりけり

年光已に逼りて、栗列甚だしく、明治廿九年も亦數日にして盡さんとす。丙寅の春秋回顧を來れば寧ろ無限の感慨なからんや。人生五十、合せて一萬八千餘日。今其の五十が一を費して成せ得

たる所。果して幾何ぞ。學界の海は渺茫として際涯を知らず。道義の路は崎嶇として前途尙は遙かなり。吾人は費したる所のそれ丈け多くして、成し得たる所のそれ丈け少かりしを惜しむ。若し夫れ心を平にし、思を靜にして之を追想せば涕涙の頤に交るを覺ゆ。學術研究の度、よく吾人學生たる任務を盡したるや否や。道義の涵養よく人たる任務を盡したるや否や。然れども除夜は古來人の多く悲みを以て送る所、吾人何ぞ又之を學ばん。吾人は寧ろ少くとも幾何の進歩ありを信じ、來らん年に向て大に成さんと欲するものなり。吾人は暗愁を以て過去を顧みんより、寧ろ大なる希望を以て、一陽來復せる新たなる天地の局面に向はんと欲するものなり。

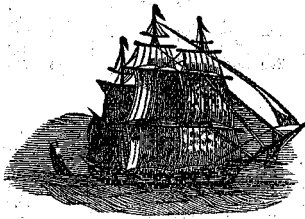
○謹んで告ぐ

百花枯凋し、萬木黃落して、年もこゝに暮れなんとす。吾會の雜誌亦實に本號を以て終刊となす。若しそれ既刊の雜誌を取りて之を檢すれば、文字蕪雜に、徒らにその紙面をけがせしを見るのみ。誠に慙愧に堪へず。冀くは歳華の改まるを待

ち、更に筆硯を新にきて相見へん。諸兄幸に益々文想を養ひ、吾が雜誌をきて尙一段の光彩あらしめよ。

○三件一東

投書家に告ぐ。我が投書家の勵精なる其投稿は積んで堆を爲せり。然れども其篇多くは雜錄欄に入るべきものの、前後輻輳、爲に吾人を乏て諸兄の心に負かしむ。あはれ願くば論說欄に諸兄の大文字を見せしめよ。



端艇部 久しく音なかりし端艇部も、這般漸く三艇の脩理を卒へ、端庫の加繕亦將に成らんとす。云ふ。四季端を改め、萬象維新なると共に、激漑たる畫湖の波上、三龍の驅逐するや期して俟つべし。

課外講義 吾人は前々號に於て課外講義の盛なるを報じ夏目、加來兩先生の勞を謝せり。猶聞く杉山教授篠本講師も、二部生の爲めに、此種の勞を取り玉へりと。惜ひ哉、朝早きが故に通學生中此餘德を蒙らざるものあり。